プロローグ
豊橋公園のアリーナ建設

　愛知県豊橋市の市役所横に広がる豊橋公園に、多目的屋内施設（新アリーナ）計画が持ち上がっています。
　市長は、豊橋公園内にある野球場を三河湾岸の同市神野新田町に移設し、跡地に新アリーナを整備する方針を打ち出しました。
　新アリーナ単体で１００億円程度とされてきたものが、新アリーナの整備に約１５０億円、球場の移設等に約７０億円、計約２２０億円の事業費に膨れ上がったようです。
　これに対して住民投票が行われる等、様々な議論がなされて来ましたが、この問題は豊橋市のみで議論すべき規模の話なのでしょうか。
　東三河の端にある豊橋公園横に豊橋市役所が建てられていますが、公園内には吉田城が残され、江戸時代から行政的に重要なエリアとされていた事が分かります。
　江戸時代の朝倉川河口の吉田城境内は、東京ドーム二十個分を超す巨大な敷地を有していました。
　徳川家康がこのエリアでの火薬の使用を特別に許可した事から、日本の花火の原点とされる天筒花火が始まります。
　吉田城主の経験者は出世コースに乗ったとされ、徳川幕府から特別に重視されていた事は確かでしょう。
　しかし、遥か太古からこの地が重視されていた可能性が存在します。
　現在は豊橋公園となったこの場所に鎮座していた飽海神戸（あくみかんべ）神明社は戦争で近隣に移転しました。
　この神社の歴史は余りにも認知されておらず、伊勢の成立にも直結する謎が秘められています。
　そしてその謎が伊勢よりも遥かに深い領域にまで通じていたとすれば、この地はアリーナ建設より遥かに重要な価値を有している事になります。
　現地調査により得られた研究内容を開示する事で、全国的な流れを出す価値があるかを、検討してみる事にしましょう。

第一章　鬼神の祭
鬼祭

　鬼や天狗が登場する祭りは全国に数十存在します。
　しかし飽海神戸神明社の鬼祭は天下の奇祭と呼ばれ、全国でも特異な祭りが継承されます。

　二月十一日午後二時より、赤鬼は総身赤の装束で固められた巨躯を城の太い紐でかがり、トラの皮のふんどしを締め、赤と銀の「だんだら」巻の撞木をかざし、赤い髪を後ろに長くたらし、赤鬼の面をかぶり、橙を刺した御幣を背に負っている。
　天狗は具足に身を固め、太刀を佩き、侍烏帽子を頂き、薙刀を持ち、鼻高の面をかぶっている。呼太鼓を聞いて赤鬼が多数の警固の若者を従え広前に走って来るとき、続いて天狗を先頭に司天司と笠良児が繰り込んで、参道の中程に控えている。
　まず、赤鬼は儀調場（八角）の中に入って跪いて神前に祈念してから、撞紐木を打振り、高足取りにて電光型に天狗に向かって進み、これから「からかい」が始まるのである。
　赤鬼が手を挙げてさし招くと、天狗もこれに答えて、同じく手を上げて招き、天狗は薙刀を構えて、大地を踏みしめながら進み寄り、飛び上がって赤鬼に迫れば、大地を踏みしめながら進み寄り、飛び上がって赤鬼に迫れば、赤鬼は義調場の前まで退き、日の丸の扇を上に掲げてたたかいを挑めば、鼻高天狗も日の丸の扇で応え、それとり広前をあるいは退き、あるいは進み、相合った時、赤鬼はここで神秘のからかいの所作を行う。天狗は怒って薙刀を持ち直して赤鬼に向かう。
　かくて、赤鬼は再三挑戦するが叶わず、だんだん追い詰められ、八角のところまで来て、遂に支えきれずして遁れ出る。この時、茶色の峠を着けた赤く見の警固の若者は、赤鬼を取り囲みながら「アーカーイ」と口々に叫びつつ二の鳥居まで逃げる。
　やがて引き返して社務所に来て、偽物のタンキリ飴の土産を置いて境内に走り出て、氏子の町々を駆け廻るのである。この時、茶色の袴を着け、赤足袋をはき、タンキリ飴の入った袋を持った赤組の大勢の若者が「アーカーイ」と呼びつつ、タンキリ飴を巻き散らすので、群衆は争ってこれを拾うのである。（豊橋まつりしおりより転載）

　赤鬼と天狗のからかいの後、赤鬼が天狗に負けて若者を連れて退場すると、天狗が司天師・笠良児を連れて八角義調場に乗り込み、扇子で切祓をして天下の清めを行います。

一説によると、鬼祭の由来は、日本の国のはじめの神話を田楽に取り入れ神祭に神事としたもので、高天原に座します大神様のところへ、暴ぶる神が現れて、悪戯をするので、武神が懲らしめようとして両神秘術を尽くして戦い、遂に和解して、一同喜んで神楽の舞をした神話がベースとなっているとします。

飽海神戸

飽海神戸神明社は平将門の乱平定の報賽として、朱雀天皇により慶三年（９４０）伊勢神宮に飽海荘が寄進された時に創建されたと伝えられています。
三河の伊勢神宮領地は、田原の本神戸、高蘆の大津新神戸、飽海新神戸、飽海新加神戸等、全てが当時の渥美郡に集結し、飽海神戸は神宮領の中で最高位だったとされています。
飽海神戸神明社の元地である豊橋公園周辺に「安曇族」が定住。集落を作り、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代から「飽海」「飽海郷」と呼ばれるようになったとされ、古から重要な地であった事が伺えます。
渥美や飽海は安曇から来たとされ、豊橋市も含めて安曇郡と呼ばれていた事から、飽海神戸の地は安曇族でも重視されていた事が伺えます。
飽海神戸神明社の御由緒には、「垂仁天皇の御代、倭姫命畏くも天照大神の大神霊を奉戴して国々を巡幸し給いし際、三河国安久美の里に一夜御宿り給うと伝えられる。」とあります。
倭姫（やまとひめ）が伊勢の地に神宮を造る前に転々と移動した元伊勢伝承は様々な地に残されていますが、飽海の地の元伊勢伝承は余りにも知られていません。
豊橋公園の発掘作業により飽海遺跡が見つかっており、神明社を建てる前から重要な地であった事が分かります。
飽海遺跡と鬼祭との間に、いかなる関係が存在したのでしょうか。

花祭

豊橋市には鬼祭以外にも鬼の登場する祭が複数継承され、石巻神社には源頼朝が鬼の面を奉納した伝承が残されています。
愛知県の山奥には、鬼を神とする祭が継承されています。
愛知県北設楽郡の山奥の山村で秘かに継承されてきたこの祭は、花祭と呼ばれる修験の祭で、早川考太郎氏により研究がなされ、全国的な認知を得ました。
花祭では夜を徹して舞われ、外から観賞するのではなく神々と共に楽しみ、大きな鬼の面は邪悪さを感じさせる事はなく、どことなくひょうきんで親しみやすい表情をしています。
設楽郡域は十世紀までは宝飯郡に含まれ、延喜式の延喜三年（九〇三）八月十三百の条に「割宝飯郡置樂郡郡（宝飯郡を割き設楽郡を設く）」と見えます。
八世紀の律令制以降に寶飫（ほお）、寶飯（ほい）郡と誤記され宝飯郡となる前の七世紀後半は、穂評（ほのこほり）と呼ばれていました。
この地域には室町時代からの古い祭りがそのまま残り、民族芸能の宝庫とも呼ばれています。
花祭は一部の学者に日本の元始祭祀として名高いものの、その継承は厳しい状況に置かれています。
北設楽郡東栄町を中心に二十数ヵ所で継承されてきたものの、滅んでしまった地区や、継承が難しく滅びつつある花祭もあります。
過疎化による祭の経費の負担増と舞子の減少のため、様々な苦難を強いられている花祭ですが、この祭には国家祭祀にまで通じる謎が秘められています。

霜月神楽

以前の花祭は、みな霜月（旧暦十一月）に行われていました。
明治以降、暦法の改正で太陰暦から太陽暦が使われるようになり、現在では十二月ないし一月に行われています。
祭場の中心に釜を置き、天に上る火と、地に下る水を合わせる湯立が行われ、中心を神の座として四方八方を巡り舞います。
湯囃子（ゆばやし）は、この湯を振りかけ、汚れを祓い神の気を受け、神の子として生まれ変わる儀式とされています。

霜月神楽は伊勢外宮との関係が指摘され、広域で継承されてはいるものの、花祭は群を抜いて豊かな芸能を保持しています。
近代では一夜の祭となっていますが、遥かに規模の大きな祭であったようです。
振草川系と古戸と大津川系の七郷では、十～十二年の間に特別の豊作が続いた年には、七日七夜の花御神楽が行われたそうです。
花御神楽を縮小した中申と言う三日三夜の祭も存在した事が伝えられています。
武井正弘氏の現地調査により、次第百数十番とも言われる大神楽が、近世初頭に修験道の先達・万蔵院鈴木氏により一日一夜の花祭に再編され、林像院らにより広められた研究が残されています。
ここまで大規模な祭が山奥に継承されてきたのは何故なのでしょうか。

鬼神と悪鬼

花祭では善なる存在である鬼神も、鬼祭では悪さをして追いやられる対象とされ、両者は全くの別物と考えられて来ました。
しかし双方の鬼には幾つもの共通点が見受けられます。
花祭の鬼は脛を後ろに跳ね上げて複雑な踊りをしますが、鬼祭ではジグザグに移動する簡単な動きではある物の、脛を後ろに跳ね上げながら前進します。
鬼祭では鬼がＴ字型の撞木を持ちますが、小林地区の花祭では茂吉鬼がＴ字型の撞木で蜂の巣を叩き、中に入っているお宝を民に与えています。
この二つの祭には、秘められた関係が存在するのでしょうか。
豊橋市は全国的にも有数な古墳の密集地であり、殆ど解明されていない古墳時代の歴史的な秘密が存在していても不思議はありません。
豊橋市から奥三河までは余りにも遠く、隠れ里と言っても良い程の山奥にあります。
山の民と言えばサンカですが、天皇家が入って来る以前の民が山奥に隠れ住み継承してきた祭であったなら、この祭には古代ヤマトの謎を解明する鍵が秘められている可能性が浮上します。
現代では悪の象徴とされる鬼ですが、なぜ鬼が神から悪鬼とされたのでしょうか。

第二章　神道と鬼

伊勢と霜月神楽

霜月神楽は子の月に行われます。
子は了（おわり）と一（はじめ）を併せ持ち、太陽神の死と再生の時期とされますが、太一（北極星の神）が住まう方位ともされます。
伊勢外宮の御祭神は北極星との関係が指摘されていますが、霜月神楽と関係するのでしょうか。
花祭で鬼神の頭領とされる榊鬼と問答する神主は度会氏と呼ばれています。
渡会氏は明治初期まで外宮の祠官を世襲しており、太古の伊勢には内宮・外宮の呼び名はなく、外宮は度会宮と呼ばれ、神宮よりも格下として扱われていました。
伊勢神宮は近年の通り名ですが、伊勢は出雲神・伊勢津彦の名から来ており、伊勢神宮では出雲神の神宮となるので、正式名称とはされていません。
源頼朝が伊勢のスポンサーとなった事で度会宮の御師（おし）が伊勢神道を広げ、度会宮が神宮と同格にまでなり、公的な祭祀しか行われなかった伊勢に庶民の参拝の流れが出て来ます。
度会氏の著した『神道五部書』は、外宮の神を鬼神と記しています。
鬼祭では鬼の上の点の無い漢字が用いられていますが、この字は後醍醐天皇を守護した九神氏も用いており、オニではなくカミと呼んでいます。
花祭では湯釜の周りで舞い、湯を振り撒く事で無病息災を得るとされる湯囃子が継承されますが、明治維新で途絶えた外宮の神楽の流れをくむ湯立神楽は霜月に行われ、湯囃子を簡略化したような儀礼が行われます。

神道と八角形

鎌倉幕府や南朝は伊勢神道をイデオロギーとしていたものの、南北朝で伊勢神道が衰退し、室町時代に伊勢神道を継いだ吉田神道が隆盛します。

京都の鬼門の守護にあたる吉田山は神楽岡と呼ばれていました。
この山の中腹には室町時代中期から神道の歴史上重要な思想を流布する事となった吉田神社が鎮座しています。
この吉田神社は藤原氏と卜部氏が祭祀を勤め、卜部氏から改名した吉田氏の吉田兼倶が文明期に創出した吉田神道（唯一州源神道）の斎条處大元宮は正八角形の台座の上に建てられており、正式名称を「日本斎条神祇斎場所日輪大神宮」とします。
日本最上の霊社、天神地祇八百万の神、六十州三千余社（三一三二社）が祀られ、毎日降臨の勝知であるとされ、室町～江戸にかけて、伊勢を越えた神道のメッカとされていました。
大元宮の御祭神は天神地祇八百萬神（あまつかみくにつかみやおよろずのかみ）とされ、八角の形状は道教の最高神・元始天尊が支配する宇宙空間とされます。
元始天尊は日本神話では天御中主神や国常立命に対応するとされ、八角形が国家祭祀にどれ程重視されていたかが分かります。
『兼倶卿』一巻・兼政朝臣にはこう書かれています。
「この斎場所は、人王の第一大の神武天王がこの国土に始めて神を祀られた最初である。即ち国土平定に当たり天下の悪神が襲い来たり、これを鎮める為に大和の生駒山に斎場所を建てて、天神・地祇を祀られたのが始めである。これにより悪い神々も漸く静まったので、又同国丹生の川上にこの斎場所を建てて御水から神道を行われた。この事があってから天下の悪事は悉く鎮まったので、日本国中大小の諸神、そうして八百万神を祝い（祀り）なされてより、今も皇城に近い所に建てておかれるのはこれに由来すると云われる。」
吉田神道の分類は神道を三つに分け、吉田神道（唯一神道）を密教が流入する以前のこの国開闢以来唯一の神道（元本宗源神道）と定義しています。
吉田神道では神を超越性と内在性を有するものとし、心を神・神明の社として神と一体的の究極的なものとしています。
宇宙の絶対的本体である国常立尊から森羅万象が生み出されたとし、心を宇宙の本体と一元ならしめる修養法を有します。
この吉田神道で重要視される行法に十八神道（天の六神道、地の六神道、人の六神道）加持が存在しますが、この十八神道行事と大元宮御礼に関する覚書が飽海神戸神明社千年紀に記されてます。
宝永五年（１７０８）四月の「お宮古書写」には「一、拙者神道ハ宗源神道ノ神道用来り候」と記されています。
飽海神戸神明社は吉田神明社と呼ばれて来ましたが、鬼祭で儀式が行われる八角儀調場は、大元宮と関係するのでしょうか。

吉田城と吉田神道

豊橋市の吉田城は牧野古白により永正二年（１５０５）に建てられ、今橋城と呼ばれていたものの、今橋が忌まわしいと連想される事から、今川義元が吉の字を入れて吉田とした事が伝えられています。
しかし、今橋の今を吉にかえて吉橋となってはおらず、今橋の今が今川から来たとしても今吉になっていません。
京都吉田山には、吉田神社の末社として木瓜大明神・今宮社が祭られています。
今宮社についての記述は余りに少なく、『京都坊日誌』によれば「吉田の末社にして旧木瓜大明神という。鎮座年不詳。建武二年（１３２５）社殿を造営す。応仁二年（１４６８）兵火に羅る。天地再建す。今の社殿は宝歴三年（１７５３）の造営なり。（今の社殿とは、現在所鎮座以前の社殿をそのまま補修・造営遷座し、今宮・木瓜両者とも氏神である事から合祀される事に成ったのではないか。）この神（今宮社）は吉田一円の氏神にして、古来より毎年八月二十四日を祭日とす。之を木瓜祭と言う」とあります。
今宮社・木瓜社両社の御鎮座起源は「詳らかならず」とどの古書・地誌でも不詳とされますが、木瓜とは何なのでしょうか。
木瓜の別名は八角楓とされ、八角（大元宮）に関わる可能性がありますが、木瓜は家紋とされていました。
木瓜紋を家紋とする古代氏族は多く、木瓜紋は日本の五大紋とされる桐・藤・木瓜・酢漿草・鷹の羽の中の一つに数えられています。
木瓜紋は八角形ではありませんが、四方に広がる花弁の中心から八方位に線が伸びる形状をしています。
木瓜紋の発祥は日下部氏と言われています。
日下部氏は日下で何故クサカと呼ぶのかと『古事記』にも疑問が記されていますが、クサカベに纏わる話は豊橋の含まれる東三河に残されています。

天皇家を二分した壬申の乱の後、天武天皇の后とされる持統天皇の子・草壁皇子は、長き渡る天武天皇の埋葬が終わると間もなく死んだとされています。
壬申の乱は大化の改新の時に蘇我入鹿を滅ぼすために中臣鎌足と共に戦った大兄人皇子（葛城皇子・後の天智天皇）の勢力と弟の天武天皇（大海人皇子）の勢力が戦ったものとされ、木瓜紋を使っていた古代の豪族、大伴氏や記氏は壬申の乱の時に天武側についたとされています。
草鹿砥氏は日下部～日下戸からクサカドと変遷したものの様ですが、日下戸は古代の太陽神祭祀の封印を暗示させます。
東三河の一宮・砥鹿神社に草鹿砥公宣公が鳳来寺の利修仙人に話をしに行く伝承が存在し、鳳来寺山文献の研究の愚聞処に「一ノ宮ノ神主カ、草鹿砥ノ名字モ、草壁氏ナルベシ。一ノ宮ノ麓里ヲ日下部ト云。」とあります。
草壁皇子の死は、東三河の古代王権断絶を意味するのでしょうか。

花祭と岩戸開き

日下部氏が三河一宮に関係していたとすれば、この地に太陽神崇拝が存在していた可能性は高いでしょう。
霜月は太陽が死に新たに陽が生まれ始める時期とされ、太陽神の死と復活に密接に関わっています。
花祭も夜を徹して舞いますが、夜明けの太陽を見るまで舞うのは、太陽神の再生儀礼に通じていそうです。
節目の行動は全体に影響を与えてるとされ、一年の節目に花祭を行う事で、国の運気を天地と調和させる儀礼が継承されてきたのでしょう。
明治までは鳳来寺にも利修仙人に由来する鬼の祭が残されており、この地域が鬼神のメッカであった事を伺わせています。
神々と共に楽しむ祭が継承されていたなら、自然界との関わりも現代文とは違っていた事でしょう。
花祭には大地の神である堅牢地神が登場し、榊鬼は大地の生命力を喚起する反閇（へんべい）の呪術を行います。
反閇は陰陽道などで行われる足の踏み込み使った呪術であり、この国の古代祭祀の深層を伺わせています。
大地の恵みを重視していた時代に、神々と舞い自然に生命力を与える呪術が行われる姿こそ、自然からの搾取で崩壊寸前の現代文明に必要な何かを伝えているのでしょう。
東三河には、どの様な王朝が存在していたのでしょうか。
この謎を解くには、この地域性だけでなく、遥かに広い視野が必要となって来ます。

第三章　倭の五王

ワカタケル

豊橋は古墳の密集地ですが、ここから北関東に古墳が伝播した事が知られています。
埼玉県のさきたま古墳群中最古の稲荷山古墳から鉄剣鉄剣が発見されました。
これにＸ線撮影を行う事で剣に記された銘文が復元され、「百年に一度の発見」として世を騒がせます。

（表）
辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比垝其児多加利足尼其児名弖已加利獲居其児名多加披次獲居其児名多沙鬼獲居其児名半弖比
（裏）
其児名加差披余其児名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也

「辛亥の年、七月中に記す。ヲワケ臣、上祖の名はオホヒコ、其の児タカリノスクネ、其の児の名はテヨカリワケ。其の児の名はタカヒシ（タカハシ）ワケ、其の児の名はタサキワケ、其の児の名はハテヒ、其の児の名はカサヒヨ（カサハラ）、其の児の名はヲワケ臣。世々、杖刀人の首と為り、今に至るまで奉事して来た。ワカタケルの寺が其鬼宮に在った時、吾は天下を治めるのを左し、令この百練の利刀を作らせ、吾が奉事の根原を記すなり。」

この銘文は様々に翻訳され、獲加多支鹵大王がワカタシロやワカタケシなどとも訳されますが、ワカタケル大王と読み、大泊瀬若武尊の異名を持つ雄略天皇とするのが一般的とされています。
ここに登場する「斯鬼（シキ）宮」は、雄略天皇の「初瀬朝倉宮」に比定されるのが定説となっています。

熊本県の江田船山古墳（五世紀後半～六世紀初頭）から出土した鉄剣に彫られた「治天下獲□□□鹵大王世」も、稲荷山古墳出土の鉄剣に見えるワカタケルではないかとされ、文官として朝廷に出仕していた事も記されています。
北九州と北関東から出土した鉄剣にワカタケルが明示されているなら、両者の間に倭王の朝廷が存在していたのでしょうか。

倭王武の上表文

五世紀の日本の記述を探ると、倭王が遣使した宗の正史『宗書』夷蕃伝・倭国条に、「倭の五王（賛・弥・済・興・武）」が登場しています。
倭の五王が中国の南朝に使者を送り、自ら「使持節都督、倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍、倭国王」、あるいは「使持節都督、倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大将軍、倭国王」と称し、この称号を認めてくれと強談しています。
使持節は使持節・持節・仮節の将軍につけられた三つの格の中で最上位とされ、都督は監督・統括の意味で軍事令官を意味します。
安東将軍は、高句麗に与えられた制東大将軍に対抗するものとも解釈されていますが、朝鮮半島の軍事統治権を得る事は、半島の王になる事と同義です。
倭王武の上表文の前半には「祖先が東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を征すること六十六国、海北を渡り平げること九十五国」と記されヤマトタケルの伝承に酷似しています。
行基図と呼ばれる古地図には、東北までの国名が記されますが、奈良時代以前にここまで広域な地図が制作されたのは、倭の五王の功績のよるのでしょうか。
朝鮮半島には倭王により統治された伝承は残されておらず、高句麗に残された好太王碑文には、百済と新羅が高句麗に属していた所、倭が辛卯年（391）から海を渡って百済を破り、新羅を臣民にしたが、高句麗が海を渡り倭を破った事が記されています。
これは倭王の上表文の内容と矛盾しますが、この好太王碑文の信憑性は如何程の物なのでしょうか。
新羅からは朝鮮半島で唯一、ギリシャ・ローマの出土品が発見されています。
半島における新羅・高句麗・百済の歴史は、高麗の残した『三国遺事』『三国史記』に記されていますが、高句麗の末裔である高麗の残した歴史書であれば、高句麗に都合の悪い歴史が改竄されている可能性は高いでしょう。

雄略天皇

雄略天皇とヤマトタケルには共通項が数多く見受けられます。
伊勢内宮は豊鍬入姫（とよすきいりひめ）命と倭姫により元伊勢と呼ばれる地を転々とし、十一代・垂仁天皇の御世に現在の地に遷座したとされますが、外宮にも元伊勢が存在し、二十一代・雄略天皇の御世に丹波から直接やってきたとされます。
ここには雄略天皇と外宮の関係が記されていますが、飽海神戸神明社の倭姫伝承には触れられていません。
雄略天皇は非道な天皇として記述され、クーデターと思しき王権の略奪を行っていますが、ヤマトタケルは卑怯で粗暴な性格で、姑息な手でクマソタケルやイズモタケルに勝った事が記されています。
『古事記』では葛城の一言主神が雄略天皇と全く同じ姿で登場し、一言主神は醜い姿で役小角に呪縛されたと伝えられますが、『役行者絵巻』ではこの神を大物主・ニギハヤヒの別名とします。
ニギハヤヒは神武天皇以前に天孫降臨してこの国の王となっていたと伝承される天孫ですが、雄略天皇が天皇家以前の王権に関係があった事を匂わせます。
『日本書記』では景行天皇がヤマトタケルに「即ち知りぬ、形は我が子、実は神人にますことを」と言い、雄略天皇を「天皇産れまして、神しき光、殿に満ちる」と記しており、雄略天皇のモデルがヤマトタケルであった可能性は高そうです。
ヤマトタケルは景行天皇の皇子とされ、各地を侵略していきますが、景行天皇の在位は西暦７１～１３０年で、『後漢書』に言う「倭國大乱」は桓帝・霊帝の間、すなわち１４６～１８３年とされているので、景行天皇・ヤマトタケルの九州～関東遠征から仲哀天皇・神功皇后・応神天皇周辺の記述は、倭国大乱を元にしたのでしょうか。
卑弥呼の記述の後、一世紀に渡り倭国は中国正史から姿を消し、空白の四世紀と呼ばれていますが、倭の五王はこの後に登場します。

半島からの侵略により乱れた国々を統治するために卑弥呼が立ち、五王がこれを継承したのであれば、ヤマトタケルの功績は輝かしい物となります。
唐の文献に卑弥呼や倭王武が記述されていた事から、『日本書紀』に取り込まむ必要があったのでしょう。

第四章　安曇族の足跡

鬼神と安曇族

倭王武が半島まで統治を広げていたとすれば、海軍の力も相当な物だったのでしょう。
渥美の名の由来とされる安曇族は海洋民族であり、安曇族の痕跡は広域に渡っています。
安曇族の痕跡のある北九州では、修正鬼会（しゅじょうおにえ）に仏の化身である鬼が登場します。
大分大学教授の日本民俗学研究所所長五来重博士（民俗学教授）は『修正会・修二会と民族』の中で、「三河の豊橋の神明社に鬼祭りがあって、鬼が町中を走りまわり、岡崎の滝山寺には田楽型修正会があり、奥三河の北設楽地方には、修正会やオコナヒはないにも関わらず「花祭」と呼ばれる鬼踊りがある。・・・三河から信濃、遠江の国境に多い神楽、田楽は修正会延年として分析する必要があり、正月の２、３、４日から１４、１５、１６日という日に集中しているのはそのためである。・・・」と豊橋の鬼祭を修正会延年の呪術芸の範疇に入れています。
慶応大学教授宮家博士は昭和５１年２月１１日に鬼祭の調査を行い、『山と祭りと芸能』で、豊橋鬼祭は国東半島の鬼修会が田楽の形で伝承されてきた物と同じであると発表しています。
長野県安曇野市には魏志鬼八面大王の伝承がありますが、飽海神戸神明社の八角儀調場で儀式をする鬼祭と同様に悪者として扱われています。
岡山県の吉備津彦神社にも原型は止めていないものの花祭の祭が存在します。ここでは奥三河と同系の舞が継承されており、桃太郎の鬼退治伝承も残されています。
秋田県にも飽海の地名が残りますが、ロシア方面との交易で栄えていたのでしょう。
青森の岩木山には巌鬼山神社が鎮座し、岩木山の裾野の鬼沢と呼ばれる集落では、節分に「福は内、鬼も内」と言うそうです。
安曇族の王により全国的に鬼の祭が広められ、各地で天地の運行と調和する儀礼が行われていたのでしょう。

原初の田原

飽海神戸神明社の創建は天慶三年（９４０）とされ、平将門の乱鎮定を祈願した朝廷は、伊勢神宮へ三河国飽海郷を神領として寄進。これを飽海新神戸といい、この時に創建されたと伝えられています。
かつて豊橋市の牛窪地方を領した一色氏を討ったとされる波多野全慶は、田原藤太秀郷（藤原秀郷）の子孫とされます。
藤原秀郷は平将門を討ち取った人物として知られていますが、この秀郷は渥美郡の謎に関わります。
渥美半島の田原には蔵王山が聳え立ち、平安朝末期の熊野族移住と共にその守護神である蔵王権現と熊野権現を奉際して山上に蔵王権現を山腹に熊野権現を祭祀し、この山を蔵王山と名付け、この地を熊野ゆかりの田原と名付けたとされています。
渥美半島の田原の地名は熊野から移されたとされるのは事実なのでしょうか。相模（神奈川県）にも田原の地名が残され、『大日本地名辞書』の相良中郡の田原の記述には、

今東秦野村の大字とす、小山文書、觀應元年、藤原秀親讓状に「相摸威田原村地頭職事」とあるは即此とす、小山氏の祖鎮守府將禿郷は田原藤太と稱しれり、盖比村に因由ありしか、波多野氏も秀郷の後なり。

とあり、相模の幡多郷（現秦野町）記述は「波多野氏は本州の名族たりき、藤原秀郷の裔孫、遠茂を家祖としたり」としています。
西川修一氏は『綾瀬市神埼遺跡の衝撃』で、神埼遺跡出土の土器は豊橋から出土した土器と全く同じ様式であったと記し、相模川両岸の発掘遺物跡から、弥生時代後期に東三河からの入植があったと見られています。
相模の田原の地名が豊橋市からの移植であれば、渥美郡に来た熊野修験により名が付けられたのではなく、弥生後期には田原の名が存在していた可能性が浮上します。
藤原秀郷は将門討伐以降は史料にほぼ登場せず、架空の存在であった可能性は高そうです。

東三河と相模の地に秀郷が絡められたのは、朝廷の傘下に下らない勢力を打ち倒したシンボル的な存在としての威光を用いる目的があったのでしょうか。
南宋時代に記された『義楚六帳』には、「今人物一如長安」「有金峰山　頂上有金剛蔵王菩薩　第一霊異」と記されています。
渥美郡が長安の様に栄え、蔵王山が第一の霊場とされていたなら、歴史に名を残す国際都市であった可能性が浮上します。
倭王武が半島の王となって中国と対等な関係を築き、その都を国際的に発展させていたなら、劣った倭人のイメージが覆されます。

安曇族の復興

花祭では一時間以上もの舞が存在しますが、成人となるための通過儀礼的な意味合いが存在したのでしょうか。
幼少期から村で舞を教える姿は、地域で子供を育てる古の記憶を思い起こさせます。
江戸末期に流行した「ええじゃないか」は豊橋市を発祥の地とし、広域に舞い踊る騒ぎが伝播しました。
天慶八年（９４５）に起こった志多羅（しだら）神上洛事件では、神輿を担いだ群衆が舞い踊り、石清水八幡宮にまで向かっています。
奥三河には設楽の地名が存在しますが、この国の深層に鬼の舞が影響を与え続けていた可能性を示しています。
多くの民衆を巻き込んだのであれば、古くから身体に馴染んだ動きであったのでしょう。
江戸時代までの日本人の身体性は、現代より遥かに高かった事が知られています。
身体の動きまで西洋化された近代日本も、花祭の舞を復興させる事で古の力を取り戻す事が出来るのでしょう。
江戸末期の倒幕運動の中、「ええじゃないか」が隆盛したのであれば、時代の節目に民族的な深層意識が浮上し、大規模な変化に対応しようとしたのでしょうか。
この舞こそが安曇族のアイデンティティーを象徴する物であったなら、花祭の全国的復興こそが、西洋化からこの国を取り戻す鍵となるのでしょう。

エピローグ
東西融合の地

倭王武の上表文に見える「祖先が東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を征すること六十六国」を解釈すると、その王朝は本州の中心に位置した可能性が高く、飽海遺跡もその候補地に挙げられます。
海洋民族である安曇族が倭王と関係が深かったとすれば、船に乗り東西に遠征をしていた事でしょう。
現代でこそ渥美半島と伊勢は遠いですが、赤引の糸で折った神御衣を豊橋市の湊神明社から伊勢に送る御衣（おんぞ）祭が継承されています。
赤引の糸は徐福が持ち込んだとする伝承が存在しますが、徐福の時代は大陸に東西融合の文明が胎動していました。
日本の歴史を見ると、西が東を征服する戦を繰り広げ、西の優位性を誇る流れが見えます。
世界史を見れば、西洋文明が植民地を拡大し、自然から搾取し、人口爆発や食料危機などの崩壊を招いています。
西洋主導文明へのアンチテーゼは、アレクサンダー大王の構築した、東西融合のヘレニズムでしょう。
西と東の戦いではなく、高い水準で両者を高度に調和させるには、中心軸が必要となります。
日本列島の中心に都を構える事で、東西の調和した国家運営がなされていたなら、これらの研究が進む事によって、計り知れない価値を世界に示すでしょう。

初瀬朝倉宮の復興

雄略天皇の初瀬朝倉宮の候補地は複数ありますが、朝倉川河口の飽海遺跡はその中に含まれていません。
倭王・武の武をタケルと読めばヤマト王タケルとなります。
飽海遺跡こそヤマトタケルが花祭を行った其鬼宮であり、ここで政祭を行い東西を統べていたのでしょうか。

卑弥呼の頃から古代世界最大の戦とされる壬申の乱まで、古墳時代が続いて来たなら、倭の五王は卑弥呼の祭祀を行い、壬申の乱まで継承されていた事になります。
壬申の乱の後に古事記・日本書紀が編纂され、日本の歴史が一本化されます。
花祭は壬申の乱で山奥に隠れた民により継承されてきた邪馬台国の祭であったなら、花祭の鬼は卑弥呼が用いた鬼道の鬼なのでしょう。
鬼祭では鬼を追いやった天狗が八角儀調場で儀式を行いますが、この八角形が吉田神道の大元宮に関わるなら、主宰神の座を鬼神から天狗が奪い去る儀式となります。
花祭が卑弥呼の時代から継承されてきた祭祀であれば、最低でも千八百年近く続けられた事になり、世界でも郡を抜いた文化遺産となります。
花祭が広域で行われてきた邪馬台国の祭祀であれば、花祭の全国的復興は倭国のアイデンティティーを取り戻す事に繋がるでしょう。
飽海遺跡が全国的な花祭の聖地であったなら、豊橋公園で花祭を行う事は、この国の歴史的・文化的に多大な意義を有します。
これだけの可能性を有する文化遺産であれば、一行政区のみで取り扱うべき対象ではなくなります。
明確に違う根拠が提示出来ないのであれば、飽海遺跡を初瀬朝倉宮の候補地の一つとして研究対象とすべきであり、日本や世界の重要な遺産に関わる可能性があれば、全国区で取り扱うべき課題となり、世界的な評価にまで直結します。
花祭では「伊勢の国　高天原がここなれば　集まり給え　四方の神々」と歌われますが、日本列島の中心地の其鬼宮に神々を呼び集めて高天原とする儀礼を復興させる意義は測り知れません。
祭はおろか国すらも消滅しかねない状況ですが、長安の如き国際都市として天地と調和した文明が栄えていたなら、鬼神の祭はどれ程の価値を提供していたのでしょう。
日本列島の中心地で倭国の古代祭祀が復興すれば、行く末の見えないこの世界情勢に、新たなビジョンを与えるでしょう。